

夏秋ギク型スプレーギクにおける消灯後の日長管理技術

～ 最初の20日間は慣行より長めの日長で ～

1. はじめに

和歌山県の夏秋ギク型スプレーギク生産では、消灯後の遮光資材を用いた日長管理技術（シェード栽培）により開花時期と切り花品質を制御し、需要期を目掛けた計画出荷を図っている。しかし、日長管理技術は生産者によって異なっており、開花時期の遅れや品質のばらつきが問題となっている。そこで、消灯後の適正な日長管理技術の開発に向けて、シェード栽培中の日長と期間が夏秋ギク型スプレーギクの開花と切り花品質に及ぼす影響について検討した。

2. 材料および方法

県内で栽培されている5品種（図1参照）について、平成29年5月30日に挿し芽を行い、6月13日に15cm間隔で6条として栽培ベッドに定植した。6月27日に摘心を行い、2本仕立てとした。定植時から7月24日の消灯まで白熱電球により深夜5時間の暗期中断を行い、消灯後からシェード栽培を開始した。シェード栽培中の日長条件については、消灯後①10日間、②20日間、③30日間を13時間日長（暗期：18時半～5時半）とし、既定日数の経過後は12.5時間日長（暗期：18時半～6時）として開花まで管理する区を設定した。また、慣行として消灯後から開花まで12.5時間日長とする区を設けた。

3. 結果

慣行の12.5時間日長と比べて、消灯後30日間を13時間日長とした場合、発蕾までの日数は1日程度の遅れであったが、開花までの日数は3～7日程度遅れた。一方、20日間を13時間日長とした場合は、‘デュエル’を除いて慣行区に対する開花の遅れは3日未満であった（図1）。

切り花品質については、消灯後20日間を13時間日長とすることで、5品種中3品種で切り花長が最も長くなり、全ての品種で葉面積が最大となった（図2）。また、13時間日長を20日間以上とすることで、‘アリエス’を除いて側花の花柄長の伸長が認められた（データ省略）。

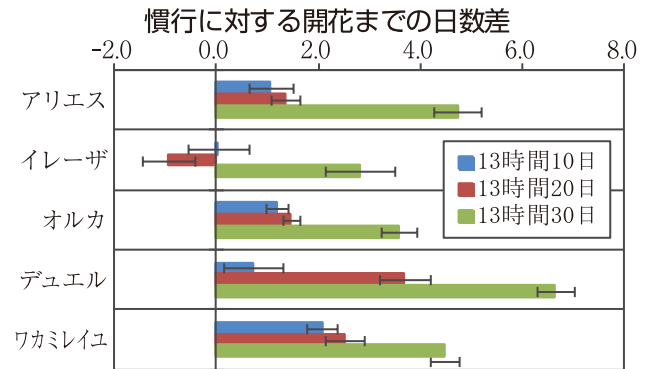


図1 消灯後の日長管理が開花に及ぼす影響
エラーバーは標準誤差を表す

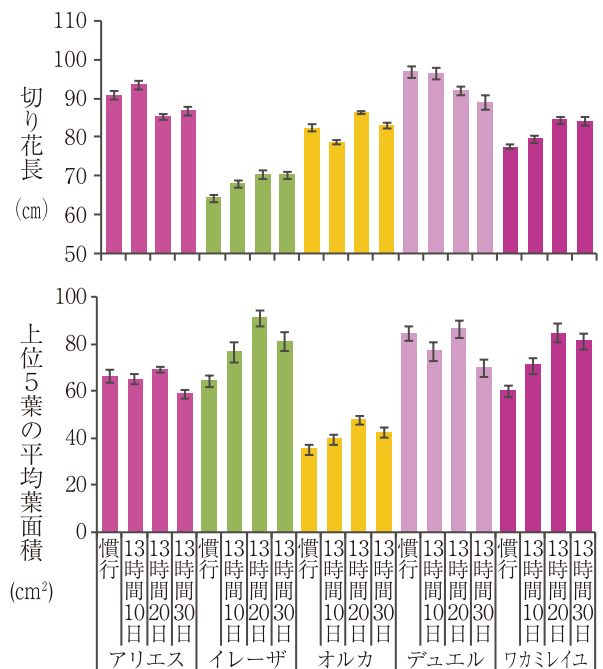


図2 消灯後の日長管理が切り花品質に及ぼす影響
エラーバーは標準誤差を表す

4. おわりに

夏秋ギク型スプレーギクのシェード栽培において、消灯から20日間を13時間日長とし、その後12.5時間日長とすることで、開花遅延を起こさずに切り花品質の向上を図ることができた。今後は、シェードの時間帯等について検討を進め、適正な日長管理技術の完成を目指していく。

(栽培部 松本比呂起)